
さくらカフェ

抹茶小豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらカフェ

【Nコード】

N3167V

【作者名】

抹茶小豆

【あらすじ】

望月さくらは25歳のOL。

日々メタバな部長にこき使われている。

ある日超イケメンの御曹司にお茶をもっていくように言われて……

？

女25歳の転換期

「あー、望月くんコピーまだ？」

でつぷりと太った部長が、鼻毛を抜いている。

（つたく、コピーくらい自分でとれつての！）

望月さくらは、内心毒づきながらも愛想笑いを浮かべた。

「はい、こちらです」

頼まれていた明日の会議の資料を部長の前に置いた。

部長は熊みたいな手で資料を繰っているのだが、資料から視線を外さずにぼつりと呟いた。

「望月くん、お茶」

（あたしはてめえの嫁じゃねえぞ！ このメタボ）

それでもこめかみにぷちつと血管が浮き出そうになるのを必死でこらえながら、望月さくらは笑顔を取り繕った。

顔が浮いている、

そんな感じがした。

給湯室の窓に額を押しつけると、ひんやりとして気持ちがいい。そうしてさくらはどつと押し寄せてくる疲労感に懸命に耐えた。疲れた。

明日行われる重役会議の資料作成のため、今日は朝から働きづめだった。

自分たちが今いる六階のフロアから、最上階の重役室を一体何回往復したことだろう。

さくらは午後になってかわいそうなことになっている自分の^{ふくばき}脹脛に目をやって、溜息を吐いた。

仕事が嫌いなわけではない。

どんな雑用だってそれは誠心誠意でやり遂げたいと思っている。職場の対人関係だって、そりゃあ良好なものを築きたいって思うか

ら、こつやつて疲れを押して、部長をはじめ同じフロアの皆のお茶を淹れにきているわけだ。

大学を卒業して早三年の月日が経とうとしている。

就職難の超氷河期の中にあつて、奇跡的に就職ができて、一応安定した収入がある。それは感謝すべきことなのだろうとさくらは思う。ヤカンに火をつけ、換気のためにさくらは窓を開けた。

二月の凍てつくような冷気がまともに入ってきて、さくらは身震いした。

コンクリートに切り取られた狭い空は、鉛色の重い雲を垂れこめて、さくらの気分をさらにブルーにさせた。

「えっ由美子が結婚？」

さくらにとって、それは寝耳に水の話だった。

その夜、さくらは大学の同級生との女子会であつたのだが、その席で友人の由美子が結婚することを告げた。

そのことは、さくらを少なからず動揺させた。

由美子は気のいい優しい子ではあるが、とびきりの美人と言つわけでもなし、さりとして頭が切れるというわけでもない。ゆえに同性からは好かれたが、異性関係はとうとうとい子だったのである。

女の25歳は多感な時期である。

結婚に焦りを感じ始めるのもこの時期で、いくら仲の良い友人であってもその胸中には複雑なものがある。

「そっか、おめでとう由美子」

そついつて微笑んだのはクループのリーダー格の麻衣だった。明る

い色のボブショートが軽やかに揺れた。

「じゃあ、お互いに新しい門出だね」

麻衣のその言葉に、なんとなく焦りを覚えてさくらが口を挟む。

「え？　もしかして麻衣も結婚……とか？」

さくらは上目づかいに斜め向かいに座る麻衣を見た。

「だったらいいんだけどね、あたしは仕事を辞めて留学することにしたの」

麻衣は少し肩をすくめて見せた。

黒いバタフライスリーブから華奢な鎖骨が覗いて、同姓であるさくらもなんだかどぎまぎとしてしまう。

タンブラーを遊ぶ麻衣の白く形の良い指が、なんだか艶めかしい。良く手入れされているネイルも、さりげなく服装と合わせた黒を基調としたもので、そのなかに色とりどりの水玉をあしらったシエルが煌めいていた。

「なんかさ、このままだったら息がつかまっちゃいそうだな」

そういつて麻衣は少し疲れたように吐息を吐いた。

「あたしがあたしでなくなちゃう。そう思ったらいつの間にか辞職届を出していたのよ。でさあ、なら、これを機にずっと憧れてた海外留学しちゃえて思ったの。今でないと、きつともうできないから」

酒と夢に少し酔っているような口調だった。

さくらは俄かに麻衣に対しても焦りを覚えた。

いつも一緒にバカをやって、青春を語り合い、失恋しては一緒に泣いてくれた友たち。

大学を卒業するまでは同じ位置に立っていたはずなのに、いつの間にか慣れ親しんだ彼女たちがとても遠くに感じられて、さくらは自分一人が立ち止まっているように思えた。

その夜は、酒を飲んでもちっとも酔えなかった。

ひとり冷水を頭から浴びたように、どこか冷めた目で友人たちをた

だ見つめていた。

——みんな変わっていく……あたしは、これでいいの？——
さくらは締め付けられるような焦燥感を苦い酒と共に飲みほした。

まだ終電までには時間がある。

女子会の終了後、さくらは駅の近くにある公園に立ち寄った。

この公園には、古い桜の大木がある。

さくらは自販機で缶珈琲を買って、桜の木の下にあるベンチに腰かけた。

プルタブを引いて一口飲むが、どうにも味気ない。

さくらは小さく溜息を吐いて、桜の巨木を見上げた。

葉も、勿論花もない冬の桜は、なんだか惨めに見えた。

「お前はあたしと同じだね。葉もなければ花もなくてかわいそう

……」

そう思わず呟いたさくらの横に初老の男が腰かけた。

「そうですかねえ？ 私はそうは思いません。こいつはね、こう見えてもしっかりと生きているんですあ。今は枯れ枝のように見えても、春に満開の花を咲かせるために準備をしているんですよ。試しにこいつの枝を折ってごらんさいよ。この枯れたようにみえる枝から桜色の樹液がでるんですよ」

男の声は少し低くて掠れた、耳に優しい声色だった。

夜の公園に見知らぬ男と二人きりだったが、不思議とさくらは警戒心を抱かなかった。

まるで何年来知り合いであったかのような、心やすさすら覚える。

「そつか、お前はえらいね。春になったら満開の花を咲かせるんだもんね。がんばれ！」

さくらはそういつて立ちあがった。

なんだか少し元気が出てきたような気がした。

しかし、刹那吹きつけてきた空っ風が、容赦なくさくらの体温を奪い、さくらの身体を小刻みに震わせる。

「はっ……はくしょん！」

さくらは盛大なくしゃみをした。

その様子に初老の男は、微笑を浮かべた。

「おや、すっかり身体が冷えてしまったようですね、お嬢さん。もしよかったらこのすぐ近くに私の経営するカフェがありますので、珈琲を飲んで行きませんか？」

それはなんだか抗いがたいような、優しい微笑だった。

カフェにて

「ここですよ」

駅前の通りを奥に一本入ったところに、そのビルはあった。

路地を一本入っただけなのに、夜の街の喧騒がまるで嘘のように感じられる静けさが、あたりを包んでいた。

街が眠っている。

さくらはふとそう思った。

葉の落ちたケヤキの並木が整然と並び、やわらかい街灯の明かりが頼りなくそれを照らしている。

見慣れたはずの街並みの違う面持ちに、さくらは云い知れぬ寂しさと人恋しさを覚えた。

しかし次の瞬間、はたと首を傾げた。

「あれ、このビル何かの雑誌で見たことがある」

さくらは思わず呟いた。

確か自分が愛読している女性雑誌でカフェの特集が組まれていたのだ。

『知る人ぞ知る隠れ家カフェ』なんかそんなタイトルだったような気がする。

建物自体はどこにでもある何の変哲もないありふれたもので、ここが雑誌で特集が組まれるほどのカフェなんだろうかと、さくらは内心不思議に思った。

ビルの二階のフロアに、そのカフェはあった。

すでにドアには『close』と書かれた小さな看板が掛かっており、カーテンが引かれてあった。

「お店閉めちゃった後なのに、すいません」

さくらはぺこりと男に頭を下げた。

「なあと、どうせ私の老後の趣味で始めた店です。厳密な閉店時間があるわけなし、構うことはありません」

男は気さくに笑って店を開けてくれた。

「あの、あなたはこれのお店のマスターなんですか？」

「まあ、そうです」

店は不思議な空間だった。

鉄パイプがむき出しになったままの天井に、古びた床材はまあ味があるといえそうなものかもしれないが、てんでバラバラの形のソファ―が四つほど置かれて、テーブル席が設けられている。

マスターが入って行ったカウンターには年代物の白黒テレビが置かれており、アンティークなレコードなんかもある。

さくらはカウンターの前の使い込まれた赤い丸椅子に腰を下ろした。

それはおしゃれとは程遠い全く統一されていない空間であるにもかかわらず……。

落ちつく。

どうしようもなく落ちつくのである。

不思議な感覚だった。

まるで時間の流れがこの場所だけ他と違っているかのように、ゆったりとしているのである。

やがて部屋にブルマンの芳香が立ち上った。

でこぼことした白い有田焼の珈琲カップに、湯気を燻らせた琥珀色の液体が注がれた。

「まあ、これでも飲んで元気を出してよ」

そういつてマスターはさくらにそれを差し出した。

「ありがとうございます。頂きます」

そういつてさくらは、男が淹れてくれた珈琲を飲んだ。

「おいしい」

今まで飲んだ、どの珈琲よりもそれは美味しく感じられた。

温かな珈琲に、きゅっと縮こまっていた心がほぐれていくような、そんな気がした。

ほっと幸せそうな吐息を吐いたさくらをみて、マスターは満足そう

に笑った。

「若い間はそりゃあ、みんな色んな事がある。悩んだり落ち込んだりもするだろうさ。けれどきつと、そのぶんだけいい事も待っているってもんだ」

「本当ですね。私も少し人生に疲れてみたり、焦ってみたりしましたけど、そのおかげで、こんなに美味しい珈琲をいただけたのですから」

さくらは少しリラックスした表情で、カウンターに頬杖をついた。自然と笑みが込み上げる。

「そうそう、その意気。そうだ、もう一つ元気のでる弦担ぎをしてあげよう。この歌を聴くと元気になるんですよ」

マスターは、ほっほっほと笑いながら、レコードの電源を入れた。年代物のレコードデッキから、懐かしいイントロが流れる。

「もうずっと昔のヒーローソングなんですけどね。お譲さんは知らないでしょうなあ」

そういつて男はレコードから流れてくる曲に合わせて歌い始めた。

（あつ、この曲、もしかして！）

さくらはテンションが上がるのを抑えられなかった。

「マスターこれひょっとして未来宇宙刑事 銀シャリバーンじゃないですか。うわー懐かしい」

さくらがそういうと、マスターは一瞬意外そうな顔をしたが、嬉しそうに目を輝かせた。

「へえ？ お譲さん今時、未来宇宙刑事 銀シャリバーンを知っているの？」

「えっと、私の兄がちょっとそっち系のマニアでして……知らない間に覚えちゃったって言うか……あのっ私はちがうんですよ？ オタクとかそんなんじゃないかって、ただちょっと覚えちゃっただけっていう感じで……」

目線を泳がせて、さくらが歯切れの悪い返事をするが、マスターは

ますます嬉しそうにテンションを上げていく。

「いやー嬉しいよ。こんなところに同志がいたなんて。さあ、一緒に歌おうじゃありませんか」

さくらはいつの間にか、マスターと未来宇宙刑事 銀シャリバーンのオープニングを熱唱していた。

「いやーさくらちゃん。串本アキラのちょっとジャイアンに似た声とか、すごい上手に真似するよね」

上機嫌のマスターはさくらに拍手を喝采した。
後にこのさくらの串本アキラのモノまねは、このカフェの名物となる。

『それでもいいじゃないか 夢があれば……』

「夢……ねえ」

さくらはふと、この歌を口ずさみながら、一瞬胸を締め付けるような焦燥とともに、自分の中に芽生えつつあるなにかに気がついたのだった。

OLのブルース

「ふぁ……眠っ」

さくらは給湯室で大きな欠伸をひとつした。

結局昨夜は終電で帰宅することになってしまい、就寝時間は深夜になってしまったのだ。

寝不足のため、頭にぼんやりと霞みがかかったようで、いまいち調子が出ない。

シンクの前にある鏡に映る自分の顔には、クマがくつきりと出てひどいことになっている。

そこに女子社員が二人やって来た。

広報課の北沢と御村である。

彼女たちはさくらの後輩に当たるのだが、地味に日々雑用に埋もれるようにしてに生息するさくらとは違い、その容姿とポジションから男性社員の視線を日々集めているのである。またその仕事柄、社内の情報に関して、隅から隅まで知り尽くす恐るべき情報網を持っていた。

「おはようございます、望月先輩。あれ？ 寝不足ですか……さては……」

北沢がそういつてニヤリと意味深に笑った。

「さては……ってなによ？」

心外そうな顔をして、さくらが北沢を見た。

「もうっ彼氏さんと……でしょ？」

そういつて御村が興味津津といった顔つきでさくらの顔を覗きこんでいる。

両腕で挟んだ格好になった御村の巨乳が、ゆっさゆっさと揺れている。

さくらはそんな彼女たちの視線に、溜息を吐きたい衝動に駆られた。自分には現在、恋人がいない。

別にそれを恥じだとは思わないが、なんとなくそう白状するのは気が引ける。

かと言って、見栄を張って『そうよ！ 私彼氏とやりまくりなの！』とはさすがにいけない。

女二十五歳の微妙なプライドを取るべきか、しかし迂闊なことを言つて、彼女たちに変な噂を流されても困る。
さくらはその場でしばらく考え込んだ。

「……先輩？ 望月先輩？」

「え？ ああ、はい」

名前を呼ばれて、さくらはしどろもどろに答えた。

「まあそんなことはどうでもいいのですが」

北沢が急に話題を転換させた。

（つていうかどうでも良かったんだ……）

さくらは、うつと言葉を呑みこんだ。

「さっき私、エントランスでツンデレ王子を見ましたよ」

御村が声を落とす。

「は？ 誰それ？」

さくらが間の抜けた声を出した。

「もう……一級建築士の鳥羽さんですよ。うちの会社の女子社員はみんな熱を上げてるんですよ」

そう言つて御村は徐に口紅を取り出した。

北沢も鏡の前で髪をとかしだす。

「本当に稀に見るイケメンですもんねえ。鳥羽さん」

そうついいながら、御村はせっせと脂取り紙で顔を抑え始めた。

「しかもうちの会社の取引先の中で最大手の鳥羽建設のご令息ときちやあ、女はみんな色めきたちますって」

北沢はうつとりと溜息をついた。

（なんだろうこの秋波は……）

さくらは彼女たちに口を挟めず、恋する乙女というよりは、むしろ

獲物を前にした猛獣のような殺気って、きっとこんな感じなんだろうなと、なんとなく思った。

そこに部長が額に汗を噴き出しながら走って来た。

「はー、ひー、はー、ひー……望月くん、ここにいたのか。うちの取引先の鳥羽建設から大事なお客様が来られたのだが、至急応接間にお茶を持ってきてほしい」

部長の発言に、その場の空気が凍りついた。

後輩たちの視線が痛いと感じるのは、けっしてさくらの思い過ごしではないはずだ。

「どうして望月先輩なわけ？」

「窓際総務なんて、所詮お茶を汲むくらいしか能がなのよ」

それは小声であつたけれど、しっかりとさくらの耳に届いていた。

あからさまな悪意というものは、ときどき対処に困る。

言葉を返せば、きっと何倍にもなって攻撃されるだろう。

しかしこのまま黙っていることも、辛い。

さくらは重い溜息をひとつ吐いて、その場を後にした。

「話はすでにあなたのお父上から聞いていますよ。鳥羽総一郎くん
応接室の革張りのソファーに腰かけ、初老の男は目の前のイケメン
をじっと見つめた。

少しだけ色を抜いた、さらりとした前髪をワックスで流し、二重の

くつきりとした瞳はダークグレイで、その顔立ちは少し日本人離れしていた。

「お恥ずかしい話なのですが……」

そういつて総一郎は下を向いた。

「俺……女性恐怖症なんです」

そうして総一郎はぽつりぽつりと身の上を語りだした。

四歳のとき、保母さんに告白されて以来、その類い稀な美貌のゆえに女性に追いかけまわされる日々を送り続け、数多くの修羅場に遭遇し、すっかりトラウマになってしまったのだという。

「じゃあ、君は男が好きなのかね？」

初老の男がそう問うと、総一郎は首を横に振って少し顔を赤らめた。「いえ、そうではないんです。女性が恐しいという思いがある半面、身体はやっぱりに女性に反応してしまうっていうか……あつ、でも僕は別に不埒な思いを抱いているわけではなくて……あのっ……そのっ……自分の妻となる女性だけを一生涯愛するつもりでいるのです」

総一郎の話を聞いて、初老の男は頷いた。

「わかりました。ではまあ、軽く見合いでもセッティングいたしましょう。今お茶を持ってくる子がそのこです。そうですね、今時の若い子ですから、見合いだなんていっただけで拒否反応を起こしてしまうかもしれません。私が一計をめぐらしましょう」

そう言つて、初老の男はニヤリと笑った。

その男、要注意人物につき

「しかし……」

初老の男の目に一瞬狡猾な光が宿った。

「この話がまとまれば、鳥羽建設の次期後継者にはあなたが指名されることになる」

革張りのソファ―に組んだ足を組み変えながら、初老の男が総一郎を見据えた。

「はあ……まあ…それは一族の決まりごとみたいなものでして、社長に就任するためには30歳の誕生日までにどうしても伴侶を娶らなければならぬのです」

総一郎は気が重そうに小さく溜息を吐いた。

自身が30歳を迎える日まで、あと三カ月をきった。

この日を見越して、今までありとあらゆる努力はしてみたのだ。いくつもの見合いクラブにも入会したし、金にものをいわせて名の通った仲人のもとにも何度も通った。しかし……無理だった。

あの何ともいえない殺気立った、人のことを獲物みたいにぎらぎらと値踏みする目が、媚びた口調が、塗り壁のごとき厚化粧が、きつい香水も、なにかもがいたずらに総一郎の恐怖心を煽りたてた。

総一郎は大概の女性と一緒にいると、三分立てば体中に鳥肌が立ち、五分で吐き気がこみあげて限界な状態になる。

「この呪われた体質から、救っていただけるのなら、その報酬は惜しみません」

総一郎は目の前の老人の手を握りしめ、涙ながらに訴えた。

やがてドアのノックとともにさくらが珈琲を持って入って来た。
「失礼します」

と目礼をして歩き出した瞬間である。

さくらは絨毯に足を取られてつんのめった。

「あつ」

さくらの悲鳴が喉で凍りつく。

その光景がスローモーションでさくらの脳裏に刻まれる。

手に持つ盆からティーカップが空を舞った。

さくらは思わず息を呑んだ。

そして……。

ティーカップから琥珀色の液体が……液体が……。

哀れ、総一郎の股間にまともに直撃した。

「熱っうー!!」

総一郎が飛び上がり、必死の形相で股間を押さえている。

「あのっ、すいませんでした」

さくらは慌ててハンカチを取り出し、それを拭こうと手を伸ばす。

「い……いや、いいからっ」

総一郎は顔を赤らめて後ずさった。

「あの、あたし氷とつてきます」

そういつてさくらは走って給湯室に走って行った。

（俺っ、格好悪っ）

ソファーに寝そべり、天井を眺めながら総一郎は深い溜息を吐いた。

そんな総一郎を、意味ありげに横目でみながら初老の男が言った。

「ではこの老いぼれめは退散することにいたしましょう」

総一郎は焦ったように、初老の男を呼び止めた。

「待って下さい、社長。この状況をわかっています？ このままではこの話はまとまりません。彼女は僕を恐らく好きにはならないでしょう」

初老の男は満足げに、笑った。

「ふおっふおっふおっ……ですから良いのです。自分に色めきたった女性は苦手なんでしょう？　だったら、自分にその気のない女性を口説き落としてみなさいな」

「うぐ……」

総一郎は押し黙った。

「では、健闘を祈っております」

そういつて初老の男は一度だけ総一郎を振り返り、部屋を出た。

部屋にひとり残された総一郎は、むっつりと黙りこんだ。

（さて……どうしたものか）

熱さはもう感じなかったが、スーツのズボンはまるでお漏らしをしたみたい染みになってしまっていた。

こんな格好では、もはや女を口説けるわけではない。

総一郎はまたも溜息を吐いた。

そのとき、ドアをノックする音とともにさくらが部屋に入ってきた。

「あの……氷です。もしよかったら冷やしてください」

そういつてさくらは総一郎にビニール袋に入った氷を手渡した。

「いや、もういいよ」

総一郎はさくらにそれを突っ返した。

「そうですか……ほんとうにすいませんでした。ではせめてこれを」
そういつてさくらは五千円札を総一郎に渡そうとした。

「クリーニング代です。えっと、今財布に持ち合わせがこれしかなくって、もし、もつとご入り用でしたらすぐにＡＴＭに走ります」

さくらは愁傷気に頭を下げた。

「いや、いらない」

総一郎はふいと顔を横に向けた。

「こんなことじゃ、僕の怒りはおさまらない」

ダークグレイの総一郎の瞳が冷たくさくらを射抜いた。

さくらは恐怖に身をすくませた。

全身の血の気が引いていくのがわかる。

「あの……では一体どうすればよいのでしょうか？」

青ざめた顔でさくらは総一郎を見た。

悪魔という生き物がもし実在したなら、きっとこういう顔をしているのかもしれないとさくらは思った。

美しく整い過ぎた、あまりにも冷たい容貌。

うちの会社の最大手の取引先の社長令息。

総一郎がさくらの腕をつかんだ。

「そうですね、では僕の奥さんになってください」

総一郎がさくらを見つめてにつこりと笑った。

「はっ？」

さくらの目が点になる。

「僕の奥さんになってくださいといったんです。日本語わかりますよね？」

総一郎に爽やかに微笑まれて、さくらのこめかみにプチッと怒りの血管が浮き上がった。

「ええ、わかりますとも。では御返答を……」

さくらはこほんと咳払いをした。

「お断りいたします。そういうお話は股に染みのないときにおっしゃらないと様になりませんものね」

さくらはにつこりと微笑んだ。

総一郎は首筋まで真っ赤になって、さくらを睨んだ。

「だっだっ誰のせいだと思っているんだー！！！！」

さくらはこのとき知らなかった、自分がなんの違和感もなしに総一郎と3分以上話をしてしまったことを……。

そしてこれがさくらにとって新たな受難の始まりであったことを……。

さくら式充電法

総一郎はコホンと咳払いを一つして、席を立ち上がった。

「だが、これはどう見ても君の落ち度のせいだろう？ 僕はこの会社の最大取引先である鳥羽建設の重役だ。僕の意味ひとつで取引を白紙に戻す事ができるということを覚えておいてくれたまえ」

そう言つて、総一郎はにっこりと微笑んだ。

その天使のような笑顔に、さくらはそこはかとない悪寒を覚えたのだった。

「ですから、クリーニング代を支払いいたしますってば……」

さくらはおずおずと総一郎を見た。

「そんなものでは、償えない」

総一郎が鼻で嗤う。

「じゃあどうしろと？」

さくらはちよつと半泣きモードである。

「だから僕の嫁になってくださいって、言っているでしょう？」

総一郎の声色が一オクターブ低くなっている。

「却下！」

さくらは思いつきり鼻の頭に皺を寄せた。

「うぬう……振り出しにもどってしまったか」

総一郎ががつくりと肩を落とした。

しかし……しかしだ。

総一郎は異性と話をして、もう20分は過ぎようとしているのだが、身体にはなんの違和感も感じなかった。

これは、総一郎にとって奇跡に等しいことであつた。

（彼女を逃せば、おそらく自分には一生チャンスはめぐってこない

だろう。逃がすものかつ！)

総一郎の全身に漲る殺気に、さくらはたじろぐ。

『君子危うきに近寄らず……』さくらの本能がそう警鐘を鳴らしていた。

「あ、あの……私……これで、失礼します」

さくらはがくがくと足が震えて、その場にへたりこんでしまいそうになるのを必死で堪えて、じりじりと出口のほうに後ずさる。

後ろ手で、ドアノブを握ろうとすると、総一郎に肩を掴まれた。

「せっせっせ……セクハラで訴えます、から」

酸欠の金魚のように、さくらは口をぱくぱくやっている。

「そんなことは、どうとでも揉み消します。それより、先ほどの償いの件ですが、とりあえずデート1回で手を打ちませんか？」

総一郎はにつこりと笑って、さくらの耳元に囁いた。

「ひっ」

さくらは、悲鳴を凍らせてその場にへたり込んだ。

「めんどくさっ！」

帰宅後、さくらはコートを脱いで、お気に入りのソファの上に寝っころがった。

脳裏には自然と、昼間に会った優男の面影が過る。

いきなり初対面で、嫁になれたの、デートしろだの……あれは絶対変態に違いない。

今やさくらには確信めいたものがあつた。

たとえどれだけ美形であつても、家が金持ちであつたとしても……

だ。

やっぱり変態はちょっと倦厭したい、とさくらは思う。

「まあいいや。嫌なことはまた今度考えよう」

さくらはそうひとりごちて、立ち上がると徐にリビングの棚からCDを取り出した。

それは現在さくらがとつぷりとハマりまくっている某戦国天下取りシュミレーションゲームのサウンドトラックであった。

法螺貝の音の後に、ゲームの登場人物たちのセリフが入っている。なかでもさくらのお気に入り、やはり〇州筆頭であった。

この筆頭は、戦国武将のくせに馬をまるでハーレーのように乗りこなし、やたらと横文字を使いたがるというこまったちゃんである。

『れつつ・ぱーりー』

スピーカーから、そのセリフが聞こえると、さくらはうつとりと目を細めた。

このゲーム以降、さくらは筆頭の中の人、つまりその声優さんにぞっこんなのだ。

「ああ、N井さん？」

少し低めの癖のあるその声に、さくらは今日一日のストレスが自分の中から消えていくのを感じた。

好きという気持ちには、とんでもないパワーがある。

どんなに落ち込んでいても、疲れていても、それでも元気になれる。また立ち上がれるのだ。

「はあ、やっぱり一日の終わりにはN井和哉で充電しなきゃね」
いつの間にか、さくらの顔に笑みが戻っていた。

部屋にインターホンの音が響く。

ドアを開けると、このマンションの大家さんが立っていた。

大家さんは少し太った気のいいおばさんで、一人暮らしのさくらの

ことを何かと氣遣つてくれるのだ。

「ちよつとさくらちゃん、実は新聞屋さんから今度の日曜日に遊園地で行われる戦隊ヒーローショーのチケットもらっちゃったんだけどね、うちの孫、あいにく都合が悪くてさ。二枚あるんだけど、さくらちゃん、もしよかつたら行かないかい？」

「はい、行きます？」

さくらの顔がほんわかと綻ぶ。

なぜなら戦隊ヒーローショーと同時に開催で、某海賊アニメショーも行われるからだつた。

（某ゴム人間が出てくるあの話ね）

大家さんを見送つた後で、さくらは万歳をした。

「やたー！ ロロノア・ロ？」

ちなみにこの某海賊アニメに登場するロロノア・ロというキャラクターの中の人、さくらがお熱をあげているN井という声優が演じているのだつた。

そして、はたとさくらは自分の手の中にあるチケットをしげしげと見つめたのだつた。

「遊園地の入場券が二枚……か」

さくらの脳裏に、某優男の顔が浮かんた。

正直、あまり気乗りはしない。

が、しかし、下手な場所に行つて会話が続き、気まずい思いをするよりは、遊園地などの、なんらかのアトラクションがある場所のほうがマシなのではないだろうかという考えも同時に過る。

「えーい、ままよ」

さくらは思い切って携帯を取り出した。

コーヒーをどうぞ

「なに？ 遊園地だと？」

携帯越しの声色が、少し低い。

その声色にさくらは場所選定を間違ったかと、一瞬後悔をした。無理もない。

相手は美形とはいえ、三十路を目前にした大会社の役員なのである。ひとくちに遊園地と言っても、某ネズミランドのごとくメジャーな場所ならともかく、地方のうすら寂れた遊園地など、誰が好き好んで出掛けようか……。

「童心を懐かしんで……戦隊ヒーローショーとか……って、やっぱり行きませんよね。すいません」

忘れてくださいと、さくらが通話を切ろうとしたときだった。

「誰が行かんといった？」

意外にも、三十路男が食いついてきた。

「えっと、じゃあヒーローショーは午後三時からなので、二時半に現地集合ということではいかがでしょう？」

そのショーは、本当は朝の十時と、午後一時と、午後三時に行われるのだが、さくらとしてはできる限り、総一郎との接触時間を減らしたいという目論見があり、最終の時間を指定したのだが、しかしその目論見は一蹴された。

「馬鹿者！ 遊園地に行くのなら、開園時間と同時に入るのが礼儀だろう」

携帯越しに、まるで部下をしかるかのごとき声色である。

（しかも開園と同時って、どんだけ張り切ってるんだよ、お前。その辺のちびっこでも、最近はお前が遊園地に対して、そんなに食いつきはしないつつの！ 嗚呼、頼むから午後二時以降にしてくれ！）

さくらは心の中で悲しき雄叫びを上げた。

（だって、日曜日のお昼は、『ゆっこにおまかせ』を見なければならぬのですもの。

『ゆっこにおまかせ』のニュースコーナーの生ナレーションで、N井さんがどうでもいいニュースを読み上げる、その雄姿というか、声を聞かなくては一週間寝つきが悪いのですもの。

N井和哉が……

N井和哉がたりないんですけどおーーーーー！！！！

一週間に一度の貴重な私の楽しみを奪わないでくれーーーーー！！！！）

さくらは魂がちぎれんばかりに（心の中で）絶叫した。

しかし、そんな心の絶叫が、相手に通じるはずもなく、待ち合わせ時間は開園の10分前に設定されたのであった。

「頼んだわよ。ブルー零」

当日、さくらは泣く泣く某テレビ番組を予録に託すことにし、家を出た。

（『ゆっこ』の生ナレーションは仕方ないけど、ただど遊園地（あの場所）では某海賊アニメショーが行われているはず。聞くところによれば、なんでも役者は生身の人間だけれど、声はアニメそのままの声を使らしい）

そう思い直して、さくらは気合を入れた。

待ち合わせ時間ジャストに到着してみれば、そこにはすでに某氏の

姿があった。

すこし苛ついた様子でこちらを見ている。

「お……おはようございます」

さくらは少し、しどろもどろとした口調で頭をさげて挨拶した。

「おう」

そう短く応じた総一郎が、心なしか赤面している。

「し……私服姿もなかなか似会っているぞ」

ぼそりと呟いた総一郎の台詞に、さくらはなんとなく背筋に悪寒を覚えるのだった。

さくらは予想に反して、総一郎が案外遊園地を楽しんでいることにまず驚いた。

「ようし、次はあれに乗ることにしよう」

いくら美形とはいえ、三十路前のおっさんが遊園地で嬉々としてはしゃいでいる光景も、なんだか異様ではあったが、まあ、本人が楽しんでるのだからそれでいいのだろうと、さくらは思う。

「待ってください。少し休憩しませんか？ 私疲れてしまって」

ジェットコースターに、お化け屋敷、サーキットにコーヒーカップと連れまわされて、さくらは少し目がまわりそうだった。

「コーヒーを淹れてきたんです。よかつたらお茶しませんか？」

そういつてさくらは自前のポットを掲げて見せた。

「君はとても古風だな。デートにお茶を持参するなんて、いまどき天然記念物だぞ？」

総一郎は少し驚いたように目を瞬かせた。

「そうですか？ 私これでもお茶を淹れるのは得意なんですよ？」

つて、そういえば初めてお会いしたとき、私躓いてコーヒーをこぼしちゃったんですよね」

思い出し、さくらはあははと笑って頭を掻いた。

「お詫びの気持ちを込めて、淹れたんですから飲んでくださいよ」

そういつてポットのコーヒーを紙コップに注いだ。

「すいません。本当はちゃんと陶器の器でお出したかったのですが、今日は紙コップで我慢してください」

総一郎は差し出されたコーヒーを一口飲んで、目を細めた。

ブルマンの芳香が鼻孔を掠め、程よい苦みが口の中にひろがり、冷えた身体を温めた。

「うまいな」

紙コップを掌に包み込んで、総一郎が呟いた。

「本当ですか？ 嬉しいです」

思わず微笑んださくらの笑顔を眩しいと総一郎は思った。

心からの笑顔というものは美しい。

一目惚れというものが本当にあるのだとすれば、自分はたぶん初対面のときから彼女に惹かれていたのだと思う。

彼女には特別に人目をひくような美しさはない、しかしその飾らないその素朴さのなかに、時折野に咲く花に覚えるような強かな感動を、確かに自分は覚えたのだった。

コーヒーは素朴で、温かな彼女の為人のような味だった。

それは一族間での権力争いにはじまり、過酷なビジネス戦争に勝ち残っていくために、いつの間にか凍らせてきた心の一部を、確かに温めて溶かしてくれたのだ。

人としての自分をちゃんと生きていると感じさせてくれる、ドロップとした時間。

総一郎は一瞬泣きそうになって顔を逸らせた。

ヒーローの条件

「うおー！ー！ー！　そこだ、イケー、スーパー戦隊セコインジャー！ー！！　そこで必殺技のノーレジ袋、エコポイント換金ビームだー！ー！！！！」

穴があつたら入りたい。

と、さくらは思った。

子ども向けの戦隊ヒーローショーに、どうしてもそこまで熱くなれる？　さくらは隣で叫ぶ、三十路一步手前の男に背を向けようと身体を擦った。

舞台変換のため、一時暗転になったところで、総一郎がさくらの様子に漸く気が付いたらしい。

「どうした？　ウエストのクビレを強調する運動か？」
エクササイズ

（死なない程度に殴りたい）

そんな願いを込めて、さくらは晴れ渡る青空を見上げたのだった。

つたく、この男ときたら、外見以外は本当にどうしようもないな。さくらは後輩の北沢や御村が、総一郎のこの戦闘ヒーローオタクぶりを見たときの反応を想像した。

その外見や権力だけを見て、女の子たちはキヤーキヤー言ってるけど、絶対この姿を見たらドン引きするに決まっている。

（イケメンってなんだろう？）

ふとさくらの頭にそんな疑問が過った。

舞台上では、ヒーローが怪人を倒し、囚われたお姫様を救出している。

ぽつと頬を染めて、ヒーローに淡い恋心を抱く、お姫様……。

イケメンがヒーローを演じている。
いや、違う。

ヒーローというキャラクターが、お姫様の好むイケメンという役柄を演じているのではないだろうか？

そして、隣でシヨーに釘付けになっている男をちらりと見やる。
（ここに、ヒーローに憧れる、イケメンがひとり……）
さくらは心の中で呟いた。

「いやー、楽しかった」
シヨーが終わると、総一郎がじつに上機嫌な様子でさくらにそう言った。

「鳥羽さんて……オタなんですか？」
さくらがおずおずと尋ねると、
「べつべべ別に、昔な。昔だよ？　っていうか、少年なら誰でもヒーローに憧れるだろう？　女の子がシンデレラやお姫様に憧れるのと同じだ」

そういつて総一郎は、照れたように赤面し、そっぽを向いた。
そんな総一郎にさくらは自然と笑みが誘われる。

戦隊ヒーローオタクの鳥羽総一郎は、いわゆる女の子の想像する理想のイケメン像からは、程遠いように思えるのだが、さくらにとつては、かしこまったスーツを着て、会社のお偉いさんの代表みたいな顔をしていた総一郎よりも、よっぽど魅力的に見えた。

「なんだ？　じつと見やがって。笑うな」

そういつて総一郎は、唇を尖らせた。

「いえ、なんだかすぐく鳥羽さんいい顔しているなと思って」
そんな総一郎の様子に、さくらはさらに微笑を誘われる。

「いや、訂正。笑っている。お前は俺の前では笑っている。お前には笑顔がよく似合う」

そういつて総一郎は微笑んだ。

それは不意の笑顔で、あきらかに反則だった。

さくらの心臓が跳ねる。

「何をしている？　さあ、行くぞ」

そういつて総一郎に、手を取られた。

「あつ、ちよつ……ちよつ……ちよつと待つてくださいって」

自分勝手　デ　我儘　デ……アマリ　ニ　強引……。

人　ノ　事ナシ　カ　全然　考エテナイ　オタク　ノ　クセニ。

オタク　ノ　クセニ……。

さくらは上昇する心拍数を抑えるために、心の中で呟いてみた。
しかし、どうやらその呟きは、高鳴るさくらの胸の動悸に勝てそう
にないらしい。

「とろとろするな！　時間が勿体ないだろう。次はあれに乗るぞ！」
そういつて、総一郎はまたもや絶叫マシンに向かって一心に走り
出したのだった。

「見てみる、お前、変な顔で映っているぞ」
丸太をくり抜いたような外装の小さな小舟に乗り込んで、急流を滑
り落りするというアトラクションだったのだが、ラストで結構な高さ
から乗り込んでいる小舟が一気に、ほとんど垂直に落下する場面が
あった。

そこでどうやら写真を写されていたらしい。

やれやれと、乗り物から降りて出口に向かう途中で、なんともいえない情けない顔で、さくらのアップがテレビモニターに映し出されていた。

（そこは突っ込むな。それが大人としての礼儀だろう）

さくらは心の中で念じたが、毎度ながらその思いは隣の三十路男には通じない。

しかも……あろうことか、総一郎は1500円も出して、その写真を購入したのである。

「なんでそんな写真……」

さくらが不服そうに口を尖らせた。

「うん？　なんか不満か？　俺たちの初デートの記念になるじゃないか」

（コイツは本当に女心がわかっていない）

さくらはがっくりと肩を落とした。

そして気づく。

現在の時刻が、12時45分であることに。

あと15分で、この遊園地の中央に位置する港で、某海賊アニメシヨールが開催されるのだ。

急がねばっ、

さくらはきつと視線を上げた。

そのときだ。

「おっ、12時45分か。そろそろヒーローシヨールの二回目の舞台がはじまるな」

総一郎が携帯で、時間をチェックしていた。

（おい、待て！　ヒーローシヨールはさっき見ただろうがっ、ここは某海賊アニメシヨールだろ？　しかもこれは一日に一回しか開催され

ねえんだよっ！！！！）

「さあ、行くぞ！ ヒーローショー」

総一郎はさくらの手を取ってずんと歩いていく。

（待って……待って、そっちじゃない、私は某海賊アニメショーが
みたいのよおお）

さくらはなおも心の中で絶叫するが、目の前に大きく『接待』とい
う単語が浮かび、悲しくも自分を自制するしかなかったのだった。

N井和哉が……

N井和哉が、足りないんですけどおお

さくらの悲しき心の雄叫びは続くのであった。

友達以上恋人未満

本日三度目のヒーローショーが終わり、景色が黄昏の色に染まるころ、園内に営業終了のアナウンスが流れた。

金色に輝く景色がやがてコバルトブルーに染まり、駅へと続く道を親子連れが幸せそうに歩いていく。

刹那、父親に手をひかれていた少女が、手に持っていた風船を手放し、赤い風船がたよりなく風に吹かれて空に消えて行った。

夢の世界が終わりを告げている。

胸に一抹の寂しさが過り、さくらは自嘲した。

「なに？ どうした」

そんなさくらを見つめる総一郎の眼差しに、さくらの心臓が跳ねる。

「いえ、別につ……」

知らず赤らむ頬を見られまいと、さくらが視線を逸らせる。

「なあ、腹減った、飯食いに行かね？」

総一郎の申し出に、さくらは財布の中身を確認してみる。

（やばいつ、あと三千円しか入っていない）

「す……すみません。私ちよつとコンビニに行ってお金を降ろしてきます」

そういつてコンビニに向かうさくらの肩を総一郎が掴む。

「いいよ。夕飯は俺が誘ったんだから」

心外そうに総一郎が眉根を寄せた。

「それに結婚したら、どのみち財布は同じわけなんだし……」

「ははっ……嫌だなあ。鳥羽さんたら、その冗談全然面白くないですよ？」

さくらの手を包み込み、総一郎が真剣な眼差しをさくらに向けた。

「俺は、本気だ。結婚しよう」

総一郎の迫力におされて、さくらはじりじりと後退する。

「いや……だからそのお話は前にちゃんと断りしたじゃないです

か。そもそも、鳥羽さんの取り巻きの女の子なんて掃いて捨てるほどいるでしょうに、なんでわざわざ私なんですか？ メンドクサイ」「メンドクサイだと？」

総一郎がぴくりと柳眉を顰める。

その形相に、さくらのセンサーが反応し、その脳裏に再び『接待』という文字が過った。

（いかん、自分。頭はアレでも奴は一応勤め先の大事な取引先の偉いさんなのだ。下手に機嫌を損ねるのは得策ではない）

さくらの頭がフル回転を始める。

（なにか、あつたはずだ。こういう状況で円満に断る方法が……ジヤイアンがいうところの『お前のものは俺のもの、俺のものは俺のもの』的な名言が確かにあつたはず……）

その時、さくらの頭上に稲妻的な閃きが走ったのだった。

（そう……あれは確か高三のとき、友人がクラスのモテ男にフラれたときの台詞）

「いえ……鳥羽さんは……私にとって……そうですね。今のところは友達以上、恋人未満ってとこかな」

はつきりとその気がないと言っても、きっと相手は納得しない。ならばそのプライドを傷つけないように、無難に逃げるのが得策であろう。

「友達以上、恋人未満だと？ ふん、まあいい。友達ならメルアドを教える」

（げっ、こいつ赤外線スタンバってやがる）

さくらはなんとか顔がひきつりそうになるのを堪えながら、メールを交換したのだった。

自分の携帯の中に、彼の名前が入っているのはなんだか心地が悪か

った。

夢が夢で終われば、その代償は少しの寂しさで済むはずだった。けどそれを現実のこととして、受け止めるには重すぎる。

そう理解しているつもりであっても、携帯に彼の名前があるのを見れば否応なしにきつと心が騒ぐだろう。

さくらは思わずため息を吐いた。

「なんだ？ 浮かない顔だな」

「なんか、緊張してしまつて」

そういつて俯いたさくらに、総一郎がぷつと噴出した。

「らしくねー」

そういつて、不意にさくらの手を握る。

「あのっ……あのっ……あくまで私たち友達ですからっ！ 友達なのに手をつなぐのってなんか変ですっ！」

さくらが真っ赤になつて、総一郎に抗議する。

「友達とは手をつなぐもんだろっ。小学校の遠足とか、マイムマイムのとときとか（笑）」

総一郎は笑いを堪えて、小刻みに震えている。

「私は、こどもじゃありません」

さくらが唇を尖らせて反論する。

「って、お前、大人でも友好の証として握手とかするだろ？ それを変に意識しているお前が変なの」

そういわれて、さくらはぐつと押し黙る。

なんだか反論すらできなくて、すごく悔しい。

腹立ちまぎれに、さくらは総一郎の手をひっぱってずんずんと大股で歩き、ハンバーガーショップの前で立ち止まった。

「私たち、あくまで友達ですからっ、私奢られるのは嫌です。だから割り勘にしましょう。ええ、そうしましょう。割り勘は日本の由緒正しいお友達のルールですからっ」

そんなさくらに、総一郎は盛大な溜息を吐いた。

「お前、本当に可愛くないな」

「うつ……なんだか胸焼けする」

さくらは駅の待合室で、座り込んでいた。

ハンバーガーに胸焼けを覚え、もはやジャンクフードを身体が受け付けない、悲しき自分の年齢を実感するさくらであった。

「ああもう、ほらとりあえず水を飲め」

そういつて総一郎が自販機で買ってきた水をさくらに手渡し、その背をずつと擦っている。

「大丈夫か？ 本当にもう、お前って奴は……」

心配と半ば呆れた声色の中にも愛おしさが滲んでいて、さくらは少し困惑する。

「あつと……大丈夫です。ご迷惑をおかけしました」
水を飲むと、胸焼けもだいぶ治まってきた。

「無理をするな。ほら家まで送ってやるよ」

そういつて差し出された総一郎の手をとって、さくらはにっこりと笑いかけた。

「迷惑ついでに、鳥羽さん、私にもう一軒付き合ってくださいませんか？
ぜひ鳥羽さんに紹介したいお店があるんです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3167v/>

さくらカフェ

2011年8月20日13時05分発行